

**実践**

## 多文化キッズキャンプ福島 2017

## —外国にルーツを持つ子どもと保護者のための宿泊交流—

日下部喜美子、佐々木千賀子(蓬莱日本語教室)

＜実践の場の特徴＞就学期に来日し日本の学校に通う子ども、日本と外国を行き来している子ども、日本で生まれ育っているが家庭内で話されている言葉が日本語ではない子どもなど、福島県内でも子どもの言語環境はひじょうに多様である。外国出身者の集住地域ではない福島県においては、外国にルーツを持つ子どもは、言葉や習慣などの違いによるストレスに加え、同じ環境に育つ子どもたち同士が知り合う機会が少なく孤立感を抱きやすい状況にあると推測される。

＜実践の目標＞今回の宿泊交流を通して、外国にルーツを持つ子どもたちが、同じ環境におかれている仲間と出会い、話す機会を提供することで、自分が置かれている状況を前向きに捉え、将来に向かって生きる力を蓄える機会とする。また、家庭で子どもへの支援が適切に行えるよう保護者へ情報を提供する。

＜具体的な実践の内容とその過程＞小学生から18才までの外国にルーツを持つ子どもとその保護者32名を対象に、平成29年6月24日25日の一泊二日で、国立磐梯青少年交流の家を会場に、20歳代のピアサポートボランティア11名を含む20名のスタッフで宿泊交流事業を実施した。交流ゲーム、野外活動、外国出身保護者による多言語での絵本の読み聞かせを実施した他、子どもはピアサポートボランティアとの個別学習、保護者は子どもの学校生活での不安を相談し合う懇談会及び読み聞かせの準備を行った。

＜結果と考察(目標の達成度・課題)＞子どもたちは、ピアサポートボランティアに見守られのびのびと過ごすことができた。外国出身の保護者たちも子どもの学校生活での不安を互いに相談し合うことができた。保護者による多言語での読み聞かせは子どもたちのルーツの文化への自尊感情を促す機会となった。